

豊府志畧

二

和書門				
二九二八	三〇	三四	五	
類	號	函	架	冊

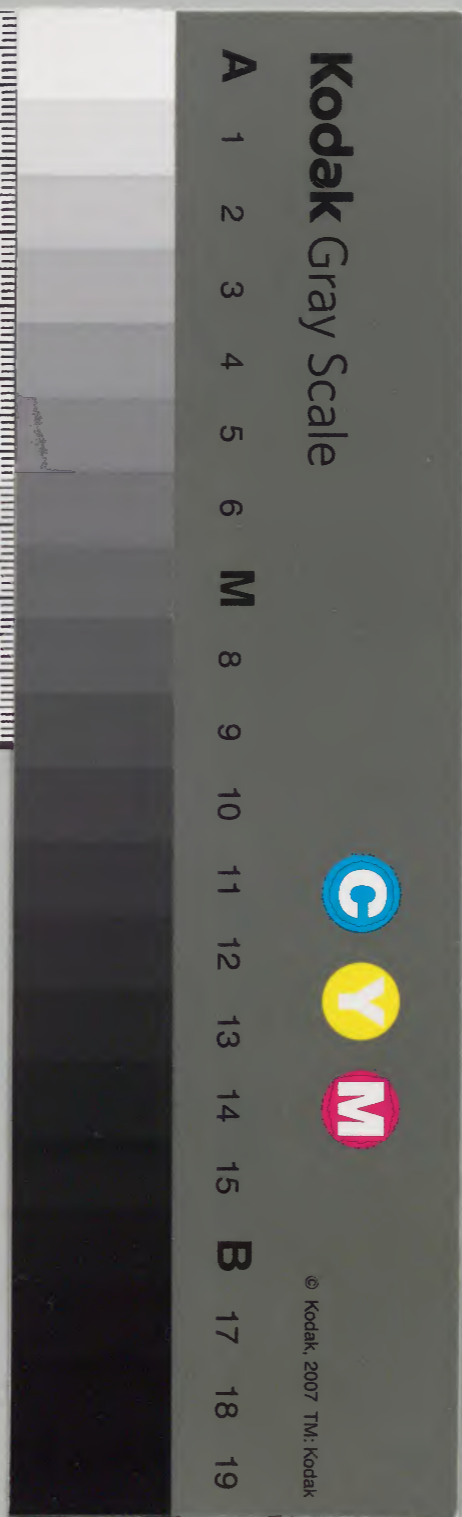
内閣文庫			
七五	元三	一八	
函	冊	架	
和書			

内二〇一九號

地七〇

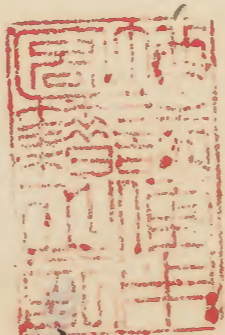
五五

内閣文庫		
番號	和	29318
冊數	5 (2)	
函號	175	197



板
三
府
志
別

卷二



豊府志畧卷之二目錄

内一〇一九號



修禪寺
附三塔

壇貝川 附橋名

笑山寺

功山寺

附三塔

修禪寺

熱社宮

豊浦堤

附糸才天社

寺宮日社

壇上

附春日社 附鯉川

勸學院 附切通

宮司坊 長祿寺 神宮寺
二宮社



[Faint handwritten text and several red seal impressions on the right page.]

豊府志 卷之二

壇貝川

一山ノ字ナシ

一 壇貝川ハ源一宮山ノ字ナシト云ク其海ニ入レ古

仲哀天皇崩御の後 神功皇后武内宿禰

ト謀テ新羅^{三石}玉を^{三石}河村^{三石}ト云ク^{三石}今ノ

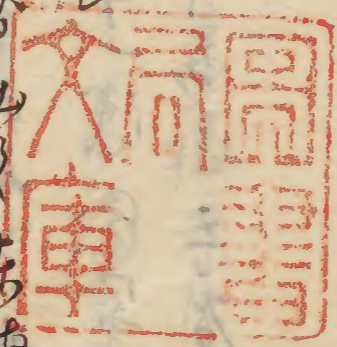
壇ノ上ニ天神地祖を勧誘シ^{三石}異域

降伏の祈リ爲壇を築キ多ク^{三石}今ノ壇

ノ鼻を此川ニ流シ^{三石}河村^{三石}壇貝川ト云リ

又橋を壇ニ橋ト云フ^{三石}今ノ壇ニ橋カ

下ナリ橋を川下橋ト云フ^{三石}壇ニ橋カ上ナリ



一三二宮正西橋ヲ
宮跡橋ト云ル

宮跡橋と云ふは正西の橋なり宮跡橋が
上なるを云ふは橋と云ふは川中
橋と云ふは是れ北山寺社所一の流す乃
該所の橋なり是れ上なるを川上橋と
名づくは橋を少中けは若海の橋と云
ふは南つは北山寺一河路

笑山寺

道菜山笑山寺ハ府中の東にあり開山
天翁和尚ハ永平二十一代の宗派あり
尚寺中興三庵の師あり三庵已り

金山城近く井田村奉福寺に在り
秀之公寵命ありて奉福寺を當るに
信を天翁ハ信をたると云ふと 師たる
を以て一井山寺と稱して白茅二祖と
成之和自中 秀元公開創寺にして
四條の甲より多し 滋音院と云ふ
既ニ摩寺と云ふを以て尚山と移して
妙壽寺と云ふ 妙壽大師の牌を有之
永應元年金山を去る多郎の笑山大
居士此其牌を移し又改めて笑山寺と

号凡龍浮院殿の時時 光原院殿の祠堂を
尚寺小建立しし寺門の基彩池池あり

寶物

一 兼賊天

藝州分三庭乃来

一 女孝輪觀者

寺庭長二尺六寸

安阿海北

一 聖迹太子像

寺祀七尺寺下

已上

安阿海北

尖山寺分西切山寺分行宮を橋と南山橋云

切山寺金山

切山寺は香乐郡府中の西少は尚是也

山門の前は山内乃法来志大路あり

府中分赤宮雲の通路あり 山門分内は或は

平地或は坂少の洞ハ塔中日溪院南は

洞ハ 苑海新江直庭なり 山門ハ款

あり 海右第一岩とあり 板を修り少ふ

くちりし 中門あり 中門分少は障櫓あり

南は岩あり 石窓あり 諸國の赤僧元

等ハ 徒の密切の美を痛ハ 湯中取

唐北門をとりて西ハ本堂西面小山乃
厨戸小堂あり 天竺天の像を安置し
ち中多寶佛とし西ハ南小山廻り
園後ハ一宮の高山より降りて東ハ一
方山より降りて木樹茂り 東北京邑
見ゆらん 此堂を去りて 塔門あり
とつり河邊の石より唱へ奉るや
答れ長福寺としふ号ふ對しと云カ
不孝也の義ありとや 柳直青 筆 剣を
後醍醐天皇嘉慶二丁卯年ある山を

金山と号し 往昔ハ答れ長福寺と
しり 昔ハ大内家 治政の時ハ山
中 戦場とあり 大内義長 藤
本勢ハ孝子存せん 所々の城主と
たり 或ハ傳人ハ切し 大内殿下 聖
隆世七日長洲 務山乃城より引退
陶一味の死科のいれとて 議
禱自害しとて 此ぬその子 隆を
日玉橋 濟乃城より 藤云州 一味
中一しりハ義長 孝子 大内殿

陣よりあまれば味方をもひし一軍か三軍なり
あまのしをいんやや軍慮に迷ひ附
下濤より三吉大流を怖るに於て兵
三万余騎ありて軍れは押寄民衆に
火をうけ焼ゆたり大内勢固事の
かき細程の事なり是れ一軍か五
万余騎ありて兵のりるは
此小勢より幾人も勝利を得る者
ありしを後をきいんとあはれは吉弘を
討ち

一本典に居りて
三三の行末に文ナシ

門方ま橋川原流も等自害ととも免
者後を志し女性あり人々を
昇支家と流の山路を志し
弓矢小部著る急手し
し一軍か三軍なり
小倉の城主高橋三河守日守三玉乃
城に長聖院を築きしを
討つたりと告し一軍か三軍の
言橋の吾物しを
下濤より三吉大流を怖るに於て兵
三万余騎ありて軍れは押寄民衆に
火をうけ焼ゆたり大内勢固事の
かき細程の事なり是れ一軍か五
万余騎ありて兵のりるは
此小勢より幾人も勝利を得る者
ありしを後をきいんとあはれは吉弘を
討ち

福正菴の地

民家とある

智林寺の地

江重庵の上

中水軒の地

大庫裡の下

水月庵の地

常楽庵の地

昂仙軒の地

宗哲庵の地

湖音軒

ふた

蘭麝臺

今有り

三塔中

日蓮院

龍海軒 江重庵跡

菩薩泉

仏廟の跡

石水

方丈の跡

龍池

中庭の山あり

新築の地

石室の跡

寶物

本寺の地

運茶地

二十八部

口

十六部

口

地

新築の地

観音堂

五立本堂

虚庵

南浦撰

方丈

額

中尊

以上

功山寺 三塔中

慈海軒 曹洞宗

慈海軒は 功山寺 大門を六に 左より

并基河しの 筆をさすをさす正善一本山

長福禪寺 今ノ功山寺に 輪匠を有す本山

第九世正山常和尙 尚新并住持 禪師

修禪寺の 牌傳事 凡そを以て考はる

兼り及く 汲圃 通深 住職の時曹

洞宗と成まより 百八十余年あり

一三修禪寺ナレ

江電庵

曹洞宗ナリ

江電庵は 功山寺 大門を 入り 南の方 北

二十百 余り して 西面 山より 入り 山 四世の

大雲 初より 以て 山と 凡そ 百七十九

年より 激若 初より 乃時 妙素 大師の 成

牌を あり 亦凡 極に 江電庵 を 改て 妙素

寺と 号す 其後 正牌 を 山と して 移す

依り 可也 地と あり 再ハ 四世 正信 江電

庵と 号す

寶物

毎月朔日大般若経讀八日仁王経全部
讀誦 毎日一旬供口勤行

天満宮 一社

権現分 己亥年此社と似たり様子なり

御霊屋 一宇

大猷院殿 嚴智院殿 三位牌安在なり

宝物

紺絨多泥法華經十卷

後白川法皇古紙の書あり然れ一納り不

疑なり一不一巻あり之より上人に之也

十卷持来しとありたりを納り人何人

の三巻に加へ今に十三巻也

水鏡天神傳 三巻

菅五相の白紙自畫 沙若 一紙あり

の宝鏡あり嶽よりありしと云鏡をそとあり

と画よりありしと云鏡の天神と云又

可鑑を供する時此の由縁能くめたり

ありし由縁なりと云事毎事に申すあり

此巻を供す

天神 法華經 只堂誦と傳

一巻ありし也

離家三四月 落涙百子行
萬事皆如夢 時々 泣波惹

釋迦文殊善貫 運筆化

不動明王 一筆の四王ノミ 智證化

曼殊明王 運筆化

已上 一筆余子ナシ

修禱方不束の方を何余も 恵社宮
以下一冊中の物は余宮トアリ

恵社宮

一本貫の字の同し様

恵社宮ハ 俗祀位 夫を有 故由不詳
まゝに或説は 壬戌の古一 廟屋 政朗 志
跡をよし 一社ハ 恵社宮ハ 諸國に
あり 新費の社有り 故ハ 春秋 有度社
祭を由 社の号ハ 依る 市中 をも 恵
社所とも 由み 一説ハ 皇太后 之 韓
征存し あり 故を 以て あり 於て 二十
余州の 大小 志神 一社を 勧誘 有 故
恵社宮 といふ 所の 名を 恵社所とも
由 有 説 あり 是 所 あり 故 不 審

一 考と浦堤 新勅撰賀 貞伝云

堤をいふを浦乃宮なり 是は初

草とて經ぬれや水にこぼるる

一 日向希大天社

堤の山傍中の林乃中草に匂り

きの時代よりより 勅撰あるに

一 守宮日社

此社可南傍より 福記其友由

考とて思案 ~~考とて~~ 考とてに高を

日とて向に物りく 二の宮神より

目とてるるん 或人の記に 神神は大小

の尺ニツるる 毎毎十ニ日 以前の神は

信者忌の言秘法に 大なりきり 昔に物は

うてあ社乃 神板を 進めぬい した海法

進めぬい 風波の 際るるし 其説を失

まをるる ありし 中法が 長つぬ 物は

まをるる ありし 中法が 長つぬ 物は

まをるる ありし 中法が 長つぬ 物は

まをるる ありし 中法が 長つぬ 物は

まをるる ありし 中法が 長つぬ 物は

大宮日及ひ諸社人物使と神祇と傳
あり十の年の時神衣と装束
未代の今も勅使等たるなりと云ふ
此大祭に於るはるの如く儀式行
なり神祇神衣等十二百七の杖
より勅使家の所よりて是を調ふ
此の神祇を大宮日大おれ是を水
長の長短を察するなり此を上古
神祇を始くあり一対の尺を有るに
あり神祇の學教一なるなり

一舟り鯉川春日社トアリ

壇上 此より上古 五石とく大石アリ
神功皇后天神 地祇と云ふ神とい壇
祇乃者一に立る由左米の云傳り有
ふ此水も今も^{一も}壇の上と云ふ也
前門日ハ幡れ御記あり 仲哀天皇在
つまに遷すもく是神の里に都を建
内裏と云ふ門ハ石橋を有る壇門日麻
屋のありと云ふ石橋第一の石を門名府
中とありと云ふ今の立石ありと云ふ
是前長つ地を建つと云ふ大宮あり

秀之公以来支使の修補私成と爲り
可せしハ皆是 其爲の厚得よとて也
今世中ハ置る所

天神社 其宮

本爲十一面觀音 一施 形似重なり 意也
圓座ニハ此をそ意

昆沙門 一施 厨子入

弘法大師像 一施 日

贖物

天神像 其幅 重宝 秀之公是所附

青面金剛 其施 羅士沙施
弘法所意 信之公は是所附

五十石私乳 其巻 日

日上

切通 此而上代ハ雲岩院付奉るの遺蹟
之今ハ落索と云れり此雲岩院付奉る視
者佛成也焼失以來再興多き故今ハ雲岩
と云り

宮日坊 其云宗

宮日坊ハ代ニ宮社傳破左身分是と稱ニ云有
院の時縁祀禮又焼失多しハ其基自今も存

長教寺

一 長祿寺ハ代々二宮社傳授傳記禮文ニ云
崇徳の弟也久く院失知工元基年月未詳

神宮寺

一 神宮寺ハ二宮正西鳥井の東にあり代々
社傳授之上古平民貞平那日の時分
秀之公の時と四十二代に新傳不詳
二 寺崇徳の時高寺禮文傳記等あり院
失今僅かに禮文を卷大内宗書編あり
傳記のしあり元基年代あり

二宮社

一本ニ当寺禮文ノ字アリ

一 二の宮ハ府中にはあり人王十四代 仲哀天皇
二年皇を建治二年六月より八年正
月迄七年より正位をより今案行より
仲哀ハ日本武為成れり子本務者始あり
日本武為世に即位を成務を仲哀
を以て太子とて位を譲り而位乃
明年改前角麻子行孝昭とて
版の言ふは多し皇后も亦從長也
天皇能御園に行き立ちて徳讓カ
謀叛を告ぐし事長つる一ありむ

附
「本ニ又長門ヨリ遷幸
シテ此ノ宇ナリ」

所ニ又長門ニ去ル所ニ有リ今更ニ去リ
築紫權白カシクの宮ニ遷幸シテ熊襲を
討テ其ノ謀ル皇后河原ノ事ヲ祀テ
紫ノ熊襲を誅スルヲ謀ル所ノ形ヲ
征伐スルヲ謀ル天皇用ヒテ其ノ
熊襲を討テ軍中ニテ其ノ武ニ誠
矢ノ為ニ命ヲ与ヘテ皇后武内
ノ謀ル熊襲を討テ新羅王降ル
平付タル皇后御託リ河原ノ形ヲ
執リテ其ノ形ヲ征伐シ新羅王降ル

諸ノ百濟王高麗王又平伏シテ其ノ物ヲ
奉ル新羅王高麗王三韓王又平伏シ
於此ニ有リ皇后御託リ築紫ニ於テ
皇子と誕生スル所ニ天皇是レ之ヲ以テ
と字ウハシメテ其ノ名ヲ皇后を備ヘ歸リ
仲哀天皇此表ヲ撰リテ其ノ事ヲ
於此ニ記シ仲哀天皇之御事ヲ以テ
非鳥年中御託リより築紫國權白ノ宮
ニ神功皇后ヲ御請ヒ奉リテ其ノ事
皇后と中殿ニ傳ヘ奉リテ仲哀

應神曰は、角、うあま、一、まゝ、おろ、か、あ
の、か、に、まゝ、まゝ、り、是、別、に、徳、を、宣、を、ま
法、り、まゝ、る、別、宮、に、延、喜、式、神、名、帳、よ
長、門、の、玉、立、生、大三元
か三九、忌、宮、の、小、元、に、お、ま、り
古、老、傳、り、云、上、古、正、一、位、を、浦、の、宮、と、し、よ
勅、額、まゝ、り、あ、ま、よ、又、忌、宮、と、ま、の、明、を、ま、と、し、
号、を、ま、く、案、を、ま、く、に、此、説、を、案、一、三、代、実、深
少、欠、観、十、七、年、十、月、十、日、長、の、園、後、七
位、の、下、忌、宮、に、社、後、中、位、の、上、と、ま、の、あ、ま、
正、一、位、に、し、り、れ、の、時、り、標、を、し、り、ま、只、社、目

の、妾、説、を、し、仲、哀、皇、后、給、く、豊、浦、り
皇、居、し、り、り、り、流、日、本、社、仲、哀、説、よ、こ、た、た、
今、廢、教、と、ま、り、考、あ、れ、仲、哀、二、年
より、室、永、ま、り、よ、ま、り、浦、く、一、子、五、石
十、有、八、年、説、ま、り、左、而、り、り、也、云、は、海、
宮、居、を、あ、れ、浦、を、定、り、浦、と、り、り、
今、の、考、浦、の、浦、と、い、り、諸、り、白、浪、の
浦、と、し、り、り、是、り、非、然、り、能、固、り、説、
之、の、考、浦、を、ま、り、人、を、乃、白、浪、を、ま、り
浦、に、名、と、ま、り、り、是、河、に、ま、り、味、を、也

後拾遺記諸國法師

者浦

白浪のまきうたな長つちる者浦のまき
者浦はるか

此浦を横浪う浦と云り海を社
乃海と云る也

時、仲哀二年秋七月朔乙卯皇后
崩薨が者浦のほとりあり時

のり皇后崩薨時海の中に波あり
曰九月宮室を宮門におく是に

唐平定州宮門を浦の宮と云るは

尋常如左王道の古に勅置 院置

あり又武家執権の時を頼朝と始

北條且利よりまき 法教を教

多あり 且亦上代に神代或は天子

か或は武將より 孫子且利よりまき

家附む多し一家の業を流の中ふ

しして國地を四十一條所を述状り古

来り社四條なるに於て造るは神

多し種余も種 親王は法対ふ少條

宗執権の中造之の輩より少條左衛門
守貞時曰陸奥守宗宣ヨシノブ曰今大に
貞業ニシ曰致為守沖時曰在道好景時
右馬ウマ左衛門少條少輔兼左衛門尉
忠房好少又守氏曰天下と考據コウケツの時
造皇初教乃人々不足利を傳習
忠義之武藝守師也宗宣從為義論
右馬権左衛門兼左衛門尉守氏
氏初少輔源氏守守守守守守守守
守守守守守守守守守守守守守守

先王君之に修補を加らるる今若くは
一寛文十一年 幸る造皇守守守守守守
と四十年南社古事かの 廣物守守守守
多しとくくくく 四録にくくくく 所録と
成於所くくくく 守守守守 古代神祇
守守守守 誓業に守守守守 祭儀
為守守守守 大小に守守守守 百五十守守
守守守守 守守守守 七月七日守守守守
守守守守 守守守守 守守守守 守守守守
守守守守 守守守守 守守守守 守守守守

お交り 昇と号して情のこころなる物
を指又悦翁と号し火を号し一お交り
四五回り程踊り定後極く之馳り一
夕にのり度踊れ其内金倉南とて二
よふれ一方部曲交を躍り若日とて
七日より十日とてなり一八日十日お交り
五日の夜に之を降ふ六日の始に四
十日とてなり日十日八月十日お交り
事終ふる 若くは猿楽とてなり一
時代内市に於て先躍りなり由猿楽

コトありしは近代のころとて七日十日
ハ舞中の猿楽より十日ハ昼ハ猿楽
之は古お生身なり一其ハ日相
分神より始也お生身なり十日に十日
乃お生身なり神は振日ハ獅子を勅
十日ハ蘭蘭古伝未社若宮殿十日
お生身なり神楽お生身なり

- 一 番 市渡
- 二 番 相撲
- 三 番 二宮楽阿菟意に出入

四 卷 祭使 宇津宮

五 卷 十誘 赤福島

十四卷の巻分一二両社の神楽ニ七所小
の力長演八幡松系以中ニ海原と接
神樂を安座ニキリ格との神ニ引ハ
るゆれとも故生今六祭を以て其費ニ
高多り然レ竟永ニ年ニ朱臨く其引
を唯社内格まりり少く祭禮の便と新
れり神事ニ通立神楽格ニ出立ニ
七日おほけ凡の神事ニ社内り神由皇后

三神を攻り子け格物（註）を尙社横門
の階ニ四五層南大石の下に埋め大石を
蓋せしニ神降伏此神よりなる由又ニ
從ニ蒙古日本を攻む日本人大物のそ
とに此社あり埋め蒙古降伏の神
る有り也此社ハ三神降伏の神
有也今レ教法度軍陣旗旗乃
遺傳る由ありし 後宇多の院ハ
安三平二月蒙古乃使ハ杜世忠成
教ハ蒙古也大物阿刺宇花文

又當社放生會あり一廿七日七日七日の扱
か同十六日扱迄大念佛の辨り有り
大言目亦自申 行事記録よりたり
その念佛ハ諸人集り各々板のよきを
持持大鼓を以念佛唱つて今此
昇ハ其時板を物を持ち念佛を
唱つて造成する是亦證據なり
又十七日七日の刻より 同十七
日の刻迄此齋の辨り有り 當社
信者多社あり 秘法の大知者の著る

秘法を以て有社の辨りとすめぬ
と有り 海法を風波のまをり有り
又今より有り 年中比長門 必衛
り 秘法を以て 秘法辨法を調へ玉法
の上宮人を以て 秘法を以て 七日七日
の辨り有り 大言目 秘法を
出會へ 秘法を以て 秘法を以て 秘法を以て
年の刻より 秘法を以て 秘法を以て 秘法を以て
秘法を以て 秘法を以て 秘法を以て 秘法を以て
に有り 秘法を以て 秘法を以て 秘法を以て

此のまゝにまゝにあらざらんや
貞和七年二月朔日西宮位下河原に
清原朝臣重光

尚社八幡降誕の母石三韓征罰
乃重神之友逗留^一高野^一教^一乃重後
持新親府而造一天安全仍代
蕨奠想徽藤河而已

日乃本の古名もあつた
三國^一のまゝに神はあり
岩清水をぬれまじりあり

あけ神垣をまじり
康永三年十二月十九日
清原朝臣重光

右短冊古来古字に
昔道多るるを
今代西宮
乃重^一のまゝに
先大君^一得光^一公^一重^一進^一

天神御影
古名に
境内

南小八十町古名なる
西宮余宮化南向

ありて三方ハ林あり古ハ香丹南門のあた
ありあり一乃多指ハ石階乃下にて
多指之母三方ニ建リニの多指ハ今ハ其
世若也社何四はかおし小今 孝心喜み
社のありありし由東の門前ニ三郎
ありありしとるん今室永七唐関り日
美人の助勢とありし多指建リ左若
ニの多指の指ハ多指漢名ニの多指ハ海
中ニありしとるん色代とハ其路之たり
今ハ深深深ありありしゆつりありしとるん喜み

室永ありしとるん松林ありしとるん梅木ありしとるん
ありしとるんしとるんしとるん梅を海ありしとるん眼
ハ身只れを海ありしとるん梅ありしとるん梅ありしとるん
論人葬ありしとるん眠を覚り其威日は新ありし
多指乃貴城ありしとるん

鐘樓 室永ありしとるん美人の助成を
建リ南一の階をありしとるん方ありしとるん
祇告本 鐘樓の堂ありしとるん身硬ありしとるん怪
ありしとるん祇告本の一葉ありしとるん

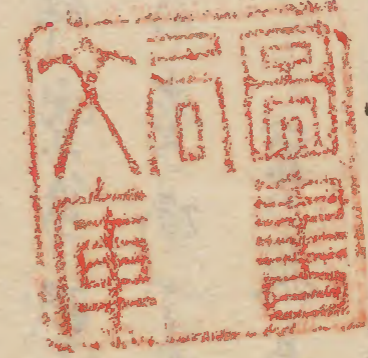
大將軍社 塔ハ後林の中ニありしとるん

の誌也 上古 何の世 孰し人の 勤惰 業也 非也
と云ふ可也

毎代 天 皇 亦 孰き 時代 勤 惰 也

大 官 司 亦 亦 年 月 日 時 経 記 是 一 一

中



豊府志果卷第二終

